

気温は低くても陽射しは明るく、もう春か。キリストの復活に向って行くけれども、その前に受難節という暗い谷底を進まねばならない。今日の御言葉は、復活の光とその周囲にある谷底の暗闇。

イエスに近づいたのはサドカイ派(マルコ 12:18)。その前には、祭司長・律法学者・長老(11:27)ら権威ある者とのやり取りがあり、当てこすりに怒って「イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れ(12:12)」、暗い憎悪を抱えて引き下がった。

その次はファリサイ派やヘロデ派(12:13)。揉み手で近づき、罠にかけようとするが(12:14)、鮮やかに斬り返されて(12:17)、「おみそれいたしました」となった。

サドカイ派とは神殿貴族で初期旧約聖書の五書のみを正典とする。五書には「復活、天使、霊」の記述はないとしてこれらを認めず(使徒 23:8)、ファリサイ派はいずれも認める(23:8)。

サドカイ派は復活を認めないが(マルコ 12:18)嘲弄する意図からか、モーセ由来の婚姻制度「レビラト婚(12:20~22)」では復活後にどうなるのかと尋ねた(12:23)。ファリサイ派の答えは定まっていて「長男の妻になる」。

イエスはぐいっと力を込めて答える。「あなたたちは聖書も神のことも知らないから、そんな思い違いをしているのではないか(12:24)」。

大祭司を輩出する由緒正しきサドカイ派が、ガリラヤ訛りの田舎ラビに「おまんらは聖書も神も知らんずら」とあけすけに言われ、一気に剣呑な空気になる。

イエスの答えはファリサイ派とも違う。つまり「死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ(12:25)」。イエスならではの注目すべき教え。

復活とは、地上の暮らしを「やり直す」ことではない。復活はある、が、まったく新しい命の形、想像に納まり得ない姿での復活だ。願望を言えば「天使のようになる」より、罪深くても人間の方がいいのだけだ。

「死者はどんなふうに復活するのか、どんな体で来るのか、と聞く者がいるかもしれない。愚かな人だ~あなたが蒔くものは~ただの種粒だ。神は、御心のままに、それに体を与え、一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになる(1コリント 15:35~38)」。

復活とは、人間の想像力を遥かに凌駕する恵みで、神的な一つの宇宙生命に吸収されたりはしない。私たちは一つ一つ、固有の体で復活するのだ。

イエスは重ねて言う。「死者が復活することについては、モーセの書の〔柴〕の箇所、神がモーセにどう言われたか、読んだことがないのか(マルコ 12:26)」。当然、熟知している。自分たちが典拠する中心箇所なのだから。

「モーセは言った。〔道をそれて、この不思議な光景を見届けよう。どうしてあの柴は燃え尽きないのだろう〕(出エジプト 3:3)」。だが、この記述が永遠の命の徴だとは分からなかった。

イエスを殺そうという陰湿な空気の中、サドカイ派が典拠するど真ん中の「消えているロウソク」にイエスは火を灯した。彼らはどう反応しただろうか。暗い憎悪の湿気が灯を消してしまったか。

キリストは私たちに対しても、己が無明のど真ん中に、己が罪のただ中に、復活の光を灯し給う。

私たちは「主に隠されている、忘れられている(イザヤ 40:27)」と、ふとってしまうことがある。だが私たちの罪の中にこそ「主は、とこしえにいます神(40:28)」であり、究めがたい方(40:28)なのだ。



《おまけのひとこと》

復活は受難の闇において出会う そうだろうな 小さな灯なのだから 順風満帆な日々では気にもか
けない灯 人は罪に沈み 闇に立ち尽くす これを幸いと言おうか 罪までが恩寵なのだろうか